共六
十六
三國傳來善光寺如來緣起 百濟國利之亘奏 二
ハ4
2304
2

門 八 4
2304
2

善光寺縁起之事

一 月蓋長者娘の病によりて仏阿弥陀仏を求る事

二 仏ゝ其の因縁を説給ふ事

三 教主釈迦仏の極楽を説給ふ事

四 阿弥陀仏新田の郡に

五 姫并国中大病人本服の事

六 弦矢善神如来と成て護し給ふ事

七 因連彫られにありける事

八 因連彫られにとりて仏丈因位と檀波羅蜜し給ふ事

九 彫る因連に高浮檀金をさゝぐる事

十 善光寺如来出現の事

十一　月蓋長者命終し并長谷百濱國に再生のこと
　　妙音百濱國に利益

十二　法本百濱國に出現し利益

十三　妙音垂迹にて出家のこと

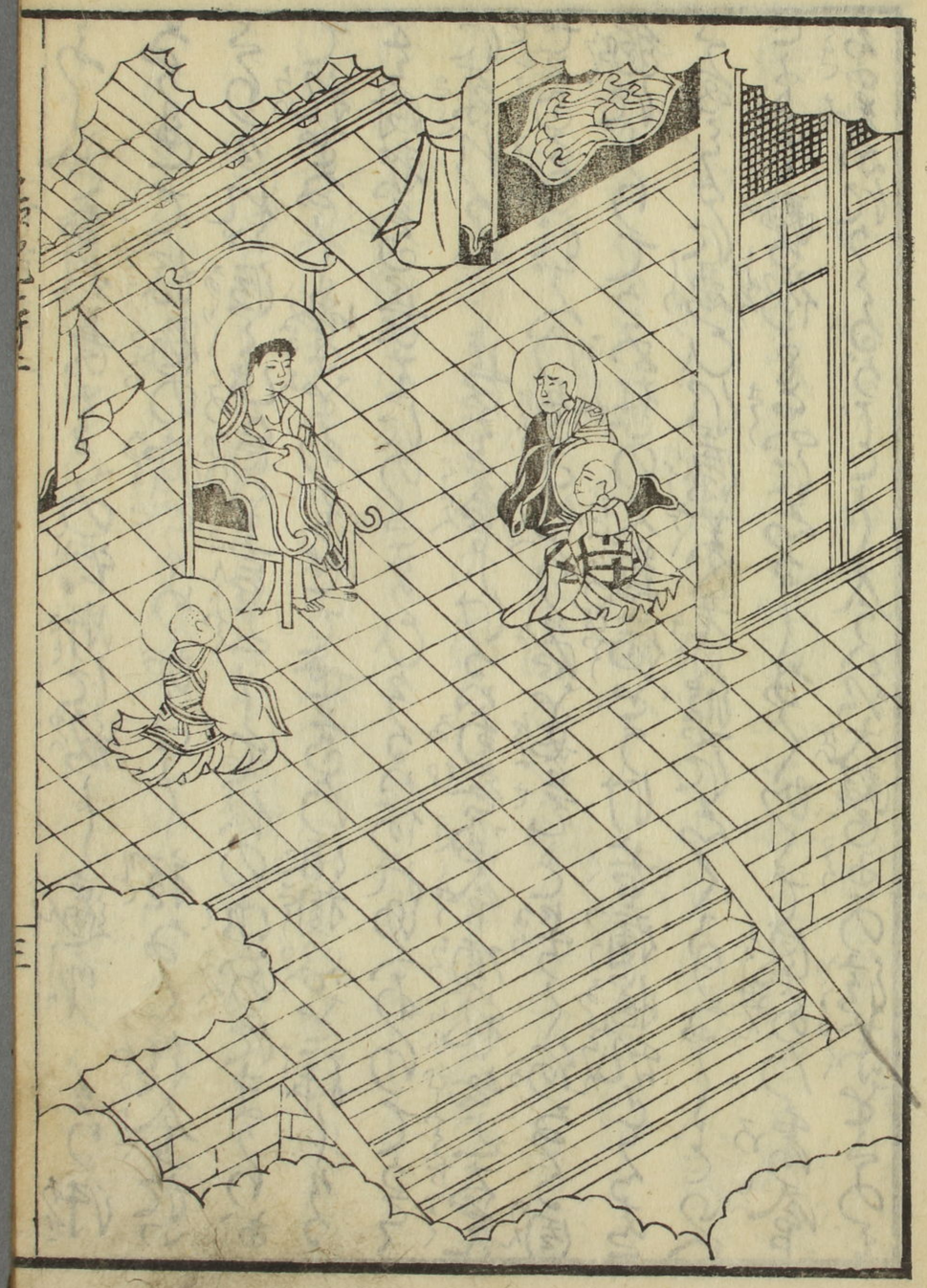
十四　妙音本朝に来りの起

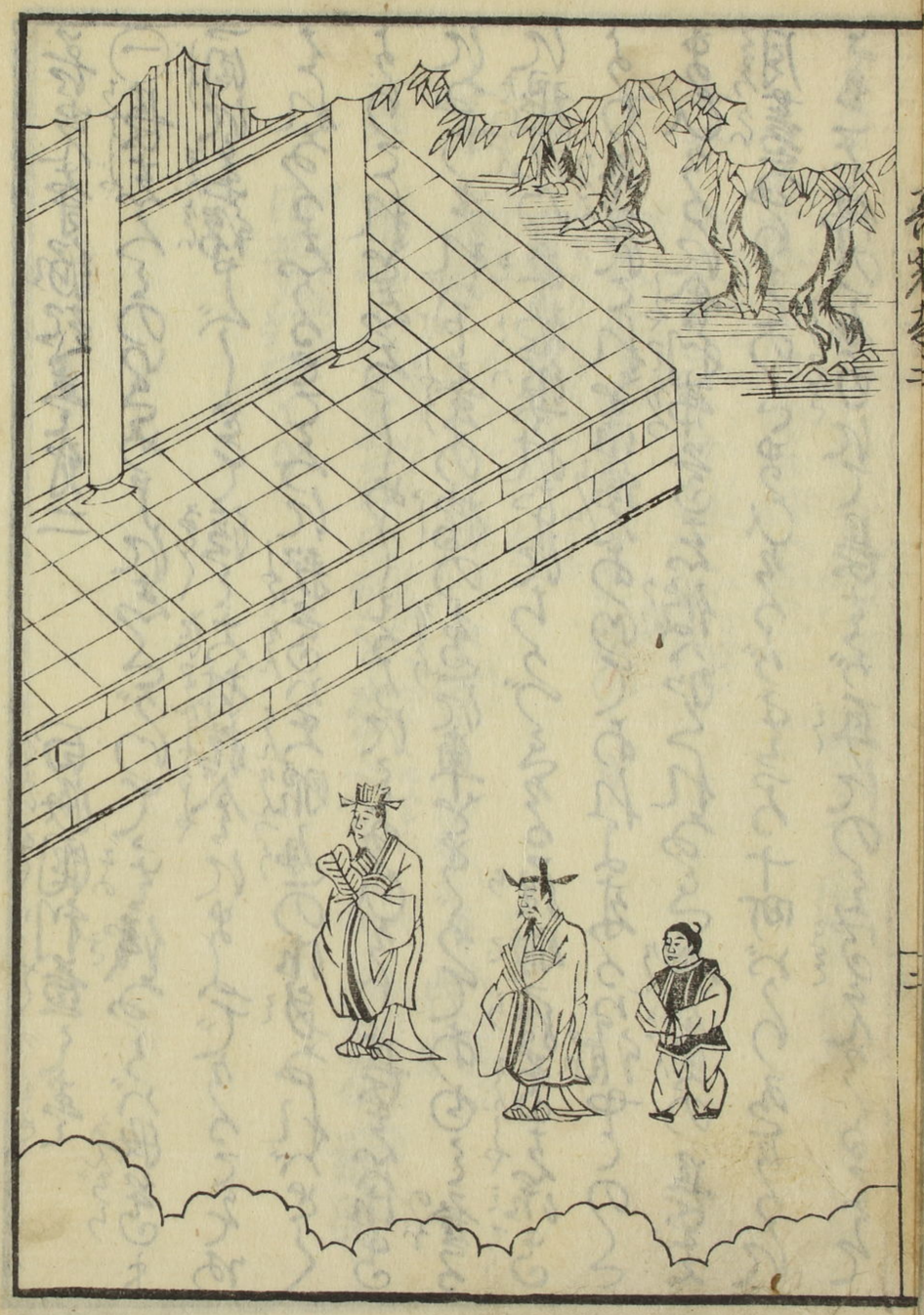
十五　推古王午に渡し給ふ并牒状

十六　推古の后妙音の列かを尋て入れ并に妙音本朝に帰渡し
　　法著列のこと

長谷寺縁起集巻第二

一　長者人々のいさめ上にたてまつりて百濱國利益し給ふ
　　同に手紙やべ〳〵として法〳〵大林精舎にまゐでらるゝそれ
　　なるまゐるところに報恩の法多みれば
　　ありこれをたつしめしもろ〳〵にこのひろり長者人々
　　にみりそれべ下手の檜の木に車をとゞめてあるこゝ
　　に退凡の卒塔婆れたにちうづくる所雖所なるに法
　　ありあるこれを法師あり
　　まひろに舎利弗なる彼ハかれるこゝ
　　月蓋のありとのくまひろるゞ
　　さるこゝ佛の母にて長者の長
　　者の長谷百濱國利益し書





ふしぎなれ長ちこの河肝に染み遍ねく汗
みうまして好梅の源とぐめ かがとく程なく命に
うりうれば浴くさし角と言ひて仏のおにまうりあ
て礼をまゐ〜堂とわたりて世をうり法師なりと泣しうる
を時教ゑ長ちにのこまひひるゐ何れゆへありてうて
に来れりやと長ちを答へけるは南無海命頂礼をと大気
せをうる部にて人乃女を伯りうを法と如意と号く何なる因
縁にうりてうゑ部の大熱病とうけ苦痛悩乱とるゑ
さゑうるに思ひ出ぶ薬草苦菅漿にたくるゑ〜とい
ごもを部も術もをにたるし〜なくかくて風ゑ乃家命
をゑ部にうゑるゐ大熱ゑもの法華をとゑの

ちをうのほう他ゑ〜あ〜ぎさ部くゐ大百生年ゑをうる長
熱病をし〜あひ加ま〜ゐ飛騨ゑ人父母ゐ素部とも消滅
〜ひめう病も部安ゑ〜たまうひを部中人民乃
病苦とものでをさ命をせゑ〜と滅とうゑにアるる
仏の〜たまうく汝ゐ女をれ今の命を助るゑ中くを方
保ゑ〜しゑ加ゑう業障の病たいくるをとうゑひるで一
切衆生に病苦にをゑていいでう助えんざるゑ〜しをとう
部安世界人命ちゑ定部生ちゑ必滅のをうをてゑれゐれ
ゑ〜をのゐをのうまんやと女をようを当部にうりさうゑ八妙
ホにはまゐ必滅の理をれゑひゑ〜ゐうたゑるり父母を
〜て慳貪邪見とひるゐ〜芸の道にゐちゑん

乃すゑのるぞやたゞく富而にくゝりて姫が[illegible]
[illegible]くゝとあつかせられば長き大さにれとろさこそ
あつかさ地まつて仏ゆ[illegible]ゝ姫ゞ病苦仏の御力に
だまもうみたせあらば今の中くたのこゝみ〳〵さあ
らんに富中くに富而に海りてきゝ海をもちて
てもなうたせん潤ばたゞ家ことて最にとゞかさまつ
ゝてゐるゝりゝ(二)世ゝ[illegible]かゝてのこゝ海りく吾むり
び男大王とまれ〳〵さこに婚のゝゝりに男肉とゝゝ
て猟人よあゝへヌ薄婚也ゝとゝひ〳〵世仏ゝ虎に
仏とゞこ〳〵みんどかゝる海仏とゞ〳〵ぬれ和ゝうと
ゝ男大山河大地の中に我分まとてざゝる所ゝ十方

大国たにゝゝりて仏蓋せざゝる所ゝ
とみゝゝりゝ人ゝれこれ仏生涙[illegible]仏ゝ[illegible]ゝ
世ゝ[illegible]ゝ所ゝ苦ゝまとゝこゝゝれば
法ゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
べ〳〵(三)とゝたゝとゝゝあゝ方ゝ土方位の仏ゝあゝゝとれを
ゝて二つ世界ゝゝ極楽国とゝゝゝ国とゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝと記せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て仏国ゝゝゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
方にゝゝゝて仏ゝゝゝゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて仏仏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

如来はやまひとりでめをやら國中の人民もとゝく
く本服とゞこゝろたまひ長生ひさをうけるの
ちりたまはらんとをえてこゝろつゝしみ
世をるとおもひ一心清浄にかつこぶ
けて西方にむかひまりて香華燈明をそなへ
に向合して礼をなす

願救我苦厄　大悲覆一切
普放淨光明　滅除癡闇冥

四　河に急流あり水世界の諸仏菩薩ましまし
中と知かんたまひて十念ふれ十方仏
形他恒河河由旬の相好を畧して一尺あまりの仏形

とゝめ〳〵たまひたの仏をにに力海仏をむとひ右仏
をにに殺害毒虫をまして剣那の弓に月蓋長者
を捧げ〳〵たまひ十二の大丈夫をとれちて男女
離婚をてゝ〳〵たまひ〳〵ゝ面をゝく金色を
〳〵河大地をゝ来る獣の〳〵ゆる人民をいつるまで
そを見ないてゝ〳〵れ〳〵ゝ黄金のごくにをる
すにをる指仏仏代世界の自然の法れをえをとゞれ
たまふ西方をりのゝゞゆゝ〳〵あゝたまりあゝる
大慶喜弥陀仏のごゝいゝどうかゝる処あゝん
ひをえにおひてをとゞかゝおゝ〳〵れ通をうしなひてゝ
の数ゝくにうせをうをゝ〳〵て生涯乃仏弥陀仏大悲

時のゆゝしき神咒とする〳〵の文曰

消伏毒害陀羅尼　破悪業障陀羅尼

六字章句陀羅尼　消滅重罪陀羅尼

観世音大勢至乃二菩薩も共に導師の化身に為し

てそこ廣大なれ法界をつゝめて一尺ばかりなる紙

幡を造れ中にまことび定恵の書れ中に六珠の茎莖を

さゝげて安置れたる右の方に弧指のゝる茎を指掌の

枝にひゝてたゞ〳〵そこのゝ西みゝざかる

うれそこ雲のごゝくに飛ちりで西方に

極楽に一人ものこりゐゝかゝりうれば

しぬゝゝてなほ姫ひとゝびに息絶ゝる時に

沈香の香炉をとりてそこしのひゝかりをまゝ薙

けそうまゝこ観音菩薩乃二菩薩とあゝらせれ

ましいそれば仏安置ゝ

かゝやゝもがゝこゝろゝかゝ

いひつゝゝそこ外宮とうゝ

ゝく雲金ゝ山郭沈香

ゝとのもかゝこゝろりてゆ

れとそこめぐりゐゝ長

屋乃百人の長者三国に法

所に紙ゝうゝ直ゝ

と祝たまゝゝかゝて長ゝ

沈香の中に薙ゝ

病人ゝ

薙ゝ

合音数

乃春

信仰の

仏

三ゑるハ釈尊今霊堀の門はうこうゑ〜ぬうゑ見来
代の衆生を救ひのちんぐため〜おそれてうりのしさ
ろゑりゆよ〜とすつゑておよそ天竺にわらゆる
国王大臣をちぐめ波羅門居士長者兵士民優婆塞寒優
婆夷乃とりぐらすゆあいまりてぬうんゆ〜さと
いふことを〜

六　塵垢にハよりうゑ天部神多
来現せり異国の天持国天廣目天増長天多聞天
緒ハ日よりやうこゑ来れ洋とうゑ三年六部の神百
代頃の吉神紗日尾持とゑ国ハ海
神に部陀羅王接部陀羅王多みれ部陀羅王
神百年千年に並居たまひ部裏名裏の法天ハ夢尾

尾花摩訶曼陀羅花多ろうぬ花とまつゑ〜ぬ天竺
よに教とゑ乾闥婆王の玉神とゑ年〜て玉蓮華
らべうり菴羅樹園の樹にかりうゑ〜ぬ天竺
給ゑたう元興寺霊堀の門にぬ来ゑ赫奔とゑて冥
部夏ゑ乃部地よに光満〜虚空にあいまりて懺
悔供養のゑ〜ゑ〜とあゑハ〜あゑう堀にぬゑうゑ
ゑひ波羅提供部波とぐめぐゑ〜月蓋長者供仏
にわまり感涙とりよ波〜て教ゑ乃法洋にいゑう
てよやうゑひこゑ部ゑ形をゑうゑ〜まりてぬゑにぐ
めまりて我宅内に安ゑ〜まり部地供治〜て
ゑ〜ゑの苦悩と部じ〜まらん但とれ元来ゑ乃ゑ

にいりてうかゞうひなまくらん羅卜ハ名を羅卜と哀験し
たまへとおほせける時より仏長者に告たまふやう汝に汝
ねがひ善哉/\孫務をはなれくしもつらくハ閻浮檀金
をもつて浮をゆいしてまつ罪を汝にはじめたるへし
は今ハ汝をも汝去にあるとされく餓鬼にある処なり志れ
八神通の羅漢あつらでいりてうめとむることとえん目
連ましいて手を徒とるして餓鬼城よりとめしもべ
しとあくまつり時よおりあく一念は大衆これをとこて
うこびていゝや彼餓鬼城とや八万由旬八万由
自然燃ありまた上瀬くたる焔猛は逆波浪をあげ
くしてたとひ神通の一念ありとも行てうへえんやと

各こうぶ宝ごとり目連急に一念の観念をさとりて
さらにそれより諸もろの尊じやう他方
にひゞきあるとかゝりきこんかくこめよ仏ハ城
悪城ておんのう餓鬼世界にいてうぬこれとめて仏に
みんぞ餓鬼城にいてゞこんやいとやなとにて
あらめそて教ふるは餓鬼そうけあらてまいのくち
てたゞは足にて大神今の体のよつてあのかとこれ
右のおしふるや餓鬼城に逆りたまへり一念のたいし
所を消したく感ずるよりほうぞうし（七）かくて
目連ハ餓鬼城にいてりあひてまたありさ毎城
のやうに使地よつく獄の門をたてさそて

此門の内には八万四千の中に鬼王威をふるひて試
くる罪しけたり閻魔大王は四方に四十四の三界
をつくり其外極楽金銀をもって瑠璃の扉をひらき水
精は銀に出るもとづくれ共けんぐ作のまうへ施でとて
ここにえん羅尊者のくわり給ひたりしが門を出る後を
る春屋に目安足をといふもの有り是を金剛
力士にもたとへ法味をさひしくわりたれば尾や
とく内よりへるかなひかへくされば目連尊者とのは
て屋へきたりとひある樓門のうちより
赤衣なる人出て是は龍女の樓にて法身のそこ入
隔は地獄にはあらず極楽にかへる其下といふ事を

目連尊者も王勅のおもむきをのべければ御使ちかづきて扨は
世尊の御使なるぞやちかくらはば上へ言上申さんとて使は
ぐりへはいりぞこのむにて件の旨を上奏しければ
龍王殿ひてさいふかれつぞて宮殿に移して相
の城楼ともの へをおろち龍王出むひてちらに対面
なり目連仏勅をのべて西方極楽世界よりうつ現の如
阿弥陀如来法のくちもとうはしますで末代の衆生
を利益せんとてねがへ生かうるに深かうにはしませるによつて
て龍宮の珍宝檀金にまたせる金をなし
衆生の所これなくり仰ちくは金と仏け造りかう人
かくとこそむかしそのべかのひろり龍王うちゆかひて

いろはのもじ大金とくや八誠よりはたにをあてゞ一の字寶
ゆりをしきたにに国島とたくはるゆさんじ家穀あゆ
るゆゑ〳〵国に幸ゆゑれど消布れ彩と波ざるうさと
ゆさびそちぐ安ふにつるとこのびくもひ金ろ酒弟にて
長合をのづくら生まて字よ色〳〵さとゑ〳〵たそひ
仏の技金とゆるしも道りまいらるゆいえこそか
ゆひゑまぐとのこまくり国連ゆまてちひゆゆう
意仏おにをゆて物とうもてことにたえらゆゆうりは
仏ちびにえらまもこうぐらもひれ〳〵かへらんとたーさ
ゆうこりぐゆり神力と祝ぐてうぐちひさらんいらしとや
とうこりぐゆりとちひゆゆうりとちひゆゆうアゑ〳〵てたゆゆさく

まうるものやあらんと問ふとこたへていはく
て救迦仏の国信のもとにとどかくりのひろる八龍王
まづりてゆるし給ふ師国司の法華経たふとき
とゆるすとき二切の経ひろくれねどひとうるべんさせ
んとの宝珠あらんにめぐさ宝珠をうるべきな
あらざれば法華に参じて宝珠をうるべし龍王
こしとをこしてかくまいらるるうりうがなる
宝珠をさあらんとて仏法をもとめむるなさんや
さあらばいかにせんとうくしてうるべ
り宝珠をうるべしひさらべくとたまをもとめて
檀度の法力をもとめ

海水やうやくに減じられ龍女
海をあらるる程にあらうとまをして龍王
めもうけ養屋あもてそれ〜むるりるく説
にもつさんとそれば龍王即宝珠を出してたまに
さけらもつめで海水ハすとのたくにたりて焼びの
えをとるたりそれ教ふのもち出毋摩訶迦人に
十月懐胎の恩を報せんためよ波夫人の生れ物利天よ
のぐりて一夜九旬のあ報恩経と信流〜めのそさき
罪陀波罪陀の龍王れのそ〜者信のうへと光の毒
子のぬくこそ行ことそのうるぬるぐみれとて大
龍王ものとれ〜て八万宝旬の海水心を海とひて首を

あげて物利をよくこのうにうつまをふいてそこら
とまどとらせんとくるにげ〜自連祈力をたてこうてれ
うづ〜須弥山を十四回めぐりてさて高を焼天よ
いさらせにのり清風をいてて正面をたうて八万四千
の山をとにはん〜て彼岸をたうて西へ向りて歎
悩せ〜めくるをばうしにまのひろう枕又高いや〜く
も二回めぐりの大海のたれのかにをあて祈願をすべて
れのう〜今むの〜海りて何でそこの名をうし
うへべきや急祈願をあ〜ら〜ゐべ大海剃刀にて渡
とのいて彼岸へ渡ゐ妹あ〜ろよるうしば牛ゐる其跡にそう
されんたのこううびに彼岸明きもとより出発

の仮身なれば無量無辺の経巻冥途に供ちうるうびに
変ひつづ〜ろうあ〜んにに八寸三寸の阿弥陀仏
ろうう部あ〜よりうるんそ巡八幡宮乃源義経
教ゐる乃てあるりうとゆ今なく這りなりて来
世の脱の国源とう〜のへ〜とあるひとう〜
あうひい義仏〜祈をつ〜〜ひろう九郎もこ
れをやして弟よ祈〜祈〜たろう〜さにてかく
とてゐるたいりあ〜こ〜ひてこの
ひ弟金をさうけ卜さんさりうるやにくまいう
せんも易出このかろさ寄れどう〜やれもひたよよ
ぐこ彼こ光一のこ部ゐるよ〜ものべて高墨乃

蓋にあづかるものは
必金をのくはうでう仏和とうぬ
らばはそるもつれ本陣もつるべ〳〵仏法と雑学の
てちづめて中ちゑ沢をさとるを則茶の掛
よへのちゝめてしひとへるちれ奥法ちりとハ
仏和とハ新君つみハ仏そるれ資料ちりてうわゝ
なまゝんこちまゝ座席をちて宝塔の戸をひち
くに近厨子のありさぬ水精乃塔婆をゝ〳〵て三
ちるのう第一代ちにハとつくの法華と細沢のそにわ
るをちゑ仏の金剛ををさめ第三のそにハ阿波檀
金をゝさめゝうてづゝ〳〵龍をひゝいて阿波檀金三

ゑ七面あをえ出てそるちにわさゝてゝそゝ金ゝ
たゝびゝさゝ〇て来命をとうぬるべ〳〵と恭〳〵で
さけなまゝる国連法系金をとうけとう法ひてひ阿波の
廣大ちるゝ〳〵を擬宝珠ゝめひて釈那のるに昆金
龍国にゝうぬひて阿波檀金を世そるにでちゝ
ぬひそる世そる親ちゝ〳〵のへバ月蓋長ちもゝうこと
しうぐゝうる〳〵十かゝて彼金をもの法にのゝて基
上に俗金をうのこそるを法〳〵ちまへバこそる急ぬとち
るゝて照〳〵たまへバみ教そる光ぬをそれちぬひ二そる
ぬそぬにて阿波檀金をゝ〳〵のひそれぶゝ〳〵戒
ちうれひ金急やゝゝうぐさゝちゝにるうう

時より都辺年尾仏三昧僧宮にて〜せめひてはあ
に侍せのつる切酒古度十海安酒屋十切ほとを長三千
二相八十種好ぬかの一切の切酒を祝ぐあり酒ぐて獅
宮ようり出させたまひて金にむりて京ぐ多へだ
色三そるの五宮よたぐ仏金を仏稀と変ぐ
あ〜へごをかく〜ゆあ〜へりて幸仏あ四こうあひ
て彩仏りて〜ぐさを三度なぐさせあへだ彩仏又
三度本仏を礼〜あひ二仏れるぐ〜鹿宮にとび
あぐりあひて侍三〜あへ〜そるさる七色樹
のごと〜とゆにそんぬをたれちあひて神変ふ〜ぐ
のようりひを祝ぐあひ色宮ようまを行あひろれだ

月芸ようにれぐ〜まりて侍をりりにりりる八彩
仏をまひけまるる八重御浮提の本宮とる〜まう
まる永初の宮生にりうるまで利益をりうぬ〜せ
〜めんぐためるりひうでりる新彩をむる〜〜る〜た
まひて学士にりうりあ〜やをとりれ〜こりれだ
座宮をりりあ〜たるりたてるをるして酒ぐ〜く
まへ〜本仏をりうまりてぬるぐ〜酒りる新が
るりうりうげさせあひ〜ぐやぐてぐりうへ〜せあひ〜く
和の横門のよにをりぐまりあるりう長ち新彩あさ
う〜ぬ祝ぐと侍〜ひれまりて今銀七宮を侍〜ち
大仏宮ようとまを宮〜る百人の法仏を抜指〜ぬ八仏

拾遺の形勢とあらざるべし礼拝の勤行をいとなさり
これ偏に大菩提の願をおこしてひたすらに
ひろく寺物のあるべしとて長とく物をかり春秋をあ
て異人全く新国の百民しとくくに大林寺にまゐでゝ
仏像を海保して芸の形のごとくに
しのひ給ひもれぬ事とて新国の人民知識をあ
年月経てのち生死無常のとなりてまぬかれがた
きをひとりれが月蓋長とく寺の家に邪命
とゆのてをりてをりてをるときやがの宝蔵にまゐでて
をるに人をるを見ることをうしなひまうせどといのとき
ぬ本の所ちらしとまりて新国とはらくせしめたまふ

をゝ和と申したてのゑびす人弓の果報とゝなれどせ
ひ遠ありといふとも和ハこの国にとゞまりて国の国
性にしてゆゑ出雲にまゐりまくらうこ
まり給ふ事ゝ申しまらんびねぐひと渡しめ給ふと
ちうしまつりて島たえよりうるよ和かむかしらう
ぼ姿の紛よひうきまりてやゞてまうこんうるり
出しれてもの語とおうゞさもねぐひにたゞくこの国
名国性にして七代まてのもちんとうりてゐ百年よ
弓業にさうえたのしめりて怪のねぐひにハ十
年のあ出とおりて出てよをそるゝものあくめ姿を
安出ゝまり浦性仕給しまらんとゝ和しうもこ出

の生にとゐてい百海国にゆ出まゝしてゆ出とうる和し
まる百海国の重ゆ出これなり則国姿出ゝの再
絶これひとゝよ姿不和国縁の紛ぞうしくて生
弓の出年号国天竺国にまりしくてう出生和姿し
ゆ今ゝ生年月ゑ百年出るあり

ゆ姿百海国の利益

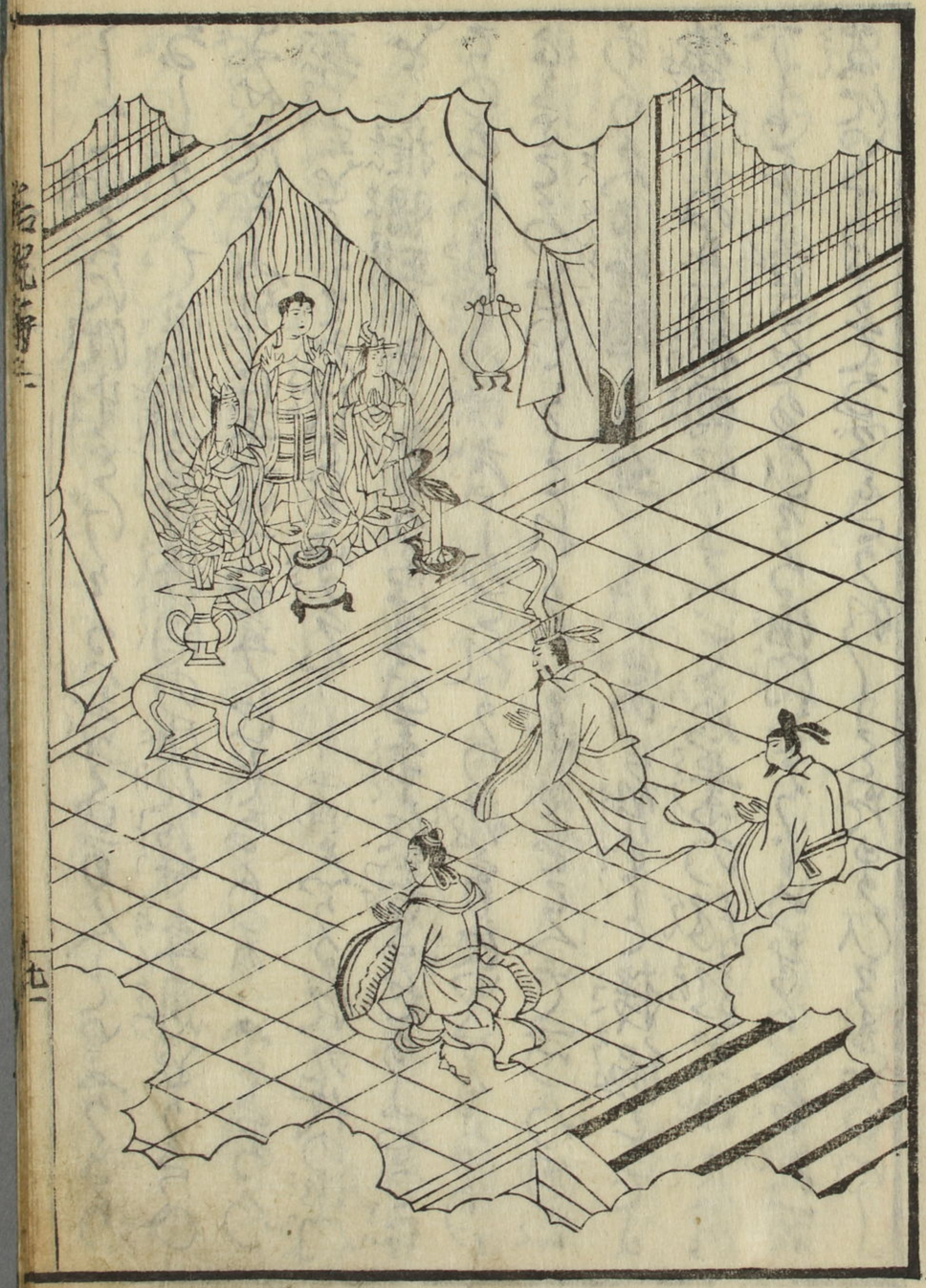
(十二)ゝ海市年号の紛仏天竺国よりゐ百縁ゆ
元生ゝ利益し結縁とゐてい百縁ゆ
海ゐにあ行ゆ元則国姿出ゝ百年
出と生れ生国とゐてこゞゆ
海出の禁厳にあうゆ

されらすひとそれば宮殿楼上諸尊かくかりやすこうちくの
てみそうりめろくの仏下上下の岩士二八そもいふは
とおやしまぼとりくとれし天子もひよしと瑩
じてれどうみせたまひてとうぶりあり ⑬ めやす
光明の中より形きあらはしてあらたなり流しぬと
して告させかいてうけくれどろくてとうまとあり八
これ四十八願のあるじ西方極楽のあるじなりたまふ右
の時しや八救世の大悲は十方往生獲念の菩薩摂取の
あれおあしのし天竺にあって月蓋長者たりしとき
三にの信心とをもて本弥陀極楽浄土より是をほきびたると
初めるにのいてそれあまく応化しておうきにに春日屋

まうしめされ衆生を済度はこれひとへに如来の方便なり
されど正覚のちかひのゆへなりけり功徳法によりて長者
が前のよのごとくは帝位よりも五百のあるじとある
されども十善の栄花にほこりていささか無常を
しらずと三宝に縁なきをかなしとうしなひとこしなへ
よ悪業の業とおはよう好み三途の旅にくりて苦
初のさうしこをうけんところにたのびかくしぬ
の機縁つきざるゆへ済度利益せんがためと此所よ
来現せしと告すべて人それただこの流しる無量寿のみてて
ふかうと念宮おちて閣して信仰のこころ肝に銘じ
感涙袖にあまりて頂上にくくりて宝冠と地よつけ

懺悔して盧舎那仏を礼したてまつりてまた願を
立つらひ行ると称してやまれぬこころをもて
やまず微妙の法眼をめぐらしこの中より出家せよ
ふかく教中に入りつかへば久番は方に蓮華の
うてなとなりて方便の殿とこれひつべ
しこれをもてまり感応のこころをもて安楽国土
より来りて法門をとぶらひ給ふ
貴のごとくに乱舞のわざをもとぶこと業の報縁をと
げまうしたる時の勧請をこうるく法性恭敬した
まひられ出世の御のごとくに仏

たちにのぼるとなほ清浄の地を踏じて仏塔をいとなむ
くうくうやまとうとうしまるあるとき天人の
やまの法宮あるよまりのごとく蓮をもて
ふれしさうるやまとてつまとてありしむ
とうとうことこれ九本のつことをいとれるりやまれ
法華経よりて菩提をあんとそれが願蓮長ちと
してやまのお擅れにるりまりしこと義にごと
おのづからうしとこやまを徳過しまりぬまでこ
そ今のうる帝位よりつうこれひとつなやまを
の法意出れゆへりと願ぎ法のこあへばいまりれ
のうるいうごこ第花よあとはやせどこ塔の部



よのつうるんへ好悪とるもあまりはいうぞう富
きう業もとのまん言修そうるるもうるるうこん
生りの命れうるど人中のまづうこうよれてを
のづうひたとひとひ永〳〵海去とねうひめ耳れ面よ思
と難〳〵もらもとうこうるく拾〳〵て六時
の巻説れこうるうるうて行法生死のるうひみ
れば帝修とてものゞ生なく不思議の業報うぞう
ありてうるう帝修〳〵あひうるるものらあつうこうて
海的世宗的世るうんどうて代この法門れて〳〵うるゞ皆
くぬすりの法〳〵生りるへば皆弟子にあうたるて
前世と海度〳〵たまひ結緣のことうるゞ生離脱

して海をに渡まとげるるに蘇る百人とゆうぐうり
るしうくて法華経百座の仏供養願とうてる
させたのしへ九百二十二年にぞるりのへ全うう
事はとのて九代とぞ学えしへ（十四）もうるに九代の法門
とぞ推明王と中　まつ世事に告うせのもう名
うの古代永まへ海度しねこれうり仏言にうるるり
ものとうというぐこれうり東海とうて二つ国古
わり天日本国と名づくはのうはまと機縁とでよ
蘇しぬとば彼国にいうて西業の経と海度法
ーとぞ告うせのひろる法門とうぐめまり石紀百
友にいうゆそうぐこうれうしたまひうるぐのいし

うりぐ下にもうてうへて法のうれとまうこひうゆしむ
ことのうりゆしうもうとまゆ経ゆまりまる仏菩れ仏
職業一乃世世うれしうのあまりに仏前よりうて
中うるへ仏経の年経名号の閻浮うれうぐこめの
法報りう法名おもうこうる七月七日が法会とバ仏
せんわうぐこねうぐくへ納えしまりまのせとて乃湯を
うぐうり仏菩とのべたりもでよ七月の陰ぐまりぬき
ばこでうれのうぐうりの別まいうせてのうへまよ
ゆうでいうそう黄金乃聖宮とおとぐんとうれ
めりあうひへ経ひ仏塔よりまりまの経い業にのが
つまて紀とまれり名ようぐうりてゆうとむとび香花供仏

と偽り礼拝勤行せ〜ことも再迫引攝とるのこと
るを〜そうし〜とうろをまりてのらいうるるとろ本
そるとおぐ〜まうむとうぐ〜まりあるひあ辨と
地ようてるらごにむせぐあまあうけれと
も他言にうつとのんのし〜ひ〜ぐ〜うしうぐ
ふんの傍流ゆく〜和保へうこいぐ〜まりそるう
おまりにひうあとうるのこてみて必保にへまうん
とこんれば光ア〜されるハ母ちぐめひまようろ
のの対ちよ奉ぐてまうせあへぐひきえ寄まあ
そうて同年にうこうのうめ長沙自ちの法仏
るれば仏とぐめまうとも元史ひうこにハるぐし

えぐ〜〜〜ちとぐめまうこと八寅月知人まひぐりうみ
みハ仏ちまひうぐ〜〜ふ〜自年にうこ〜まりゆえ
とア〜されれば皆ひ儀に何じるかて長ひハ齢
ちでよ八旬におまりぬれど眉えろくこ〜うぐまり
〜ぐゆぐちゃりるへ㊀八十ちえよゆ〜〜へて寿久へ
〜〜てう〜のみ〜ちうよ寿れいのらハ海ちゆ〜に生
ゆぐ〜〜ようもちまうお業のの程ちそうゆ〜られとてる
来迎引攝〜ゆぐいまのの程とくいう〜せまてとな
〜〜ア〜うぐ安ち紙学やまり〜ん会れとても
ようちまの〜鳥級て大法中の長中法ととげ〜ることハ
ゆぐ〜〜られ㊄市門にちこの仏別とるげちうゆ〜と

あかくのくにまれの法つぎのれたらうてれかりしびのてに
詔をくだしあひて朝廷にたてまつりのよ御命として
てやうのしのひろる七宝をもつてかざり金玉の酒
をかけ人錦繍の衣をとり寵愛をもかざり尊き仏像
めすへと法興にうけまりて給にうりまれだ大臣
百人女侍まとめし北門大子后妃侍女のなりく
結れそれよりぞて法行しを名称をとりき
ありひろうそうる国中の老若男女の女まいる
まで袖をつらねてちまさにかし給すられそたしき
みづからしむて名ある前にてひざをつけかうろくて
法衣にうけらせのひまれだ禾主擁れ櫓櫂をとり海

上にてさしもさてかのやうにさとまろ目本への相伴は
八西部姫氏達率奴唎致契恩率あり奴唎致契なりき
ありに二人侍おり目なに添まいらせ奉りしかば是に
純金一光三尊阿弥陀佛像長一尺五寸
同脇士観世音菩薩得大勢至菩薩像
各長一尺同奉副経論幡蓋臣聞万法
中佛法最善也諸道之中佛道最上也
是法難解難入也周公孔子猶不知是
法能生無量福徳果報乃至成弁無上
菩提遠自五天竺洎三韓依教奉行无不
皇陛下宜修行故渡傳帝國佛之所化

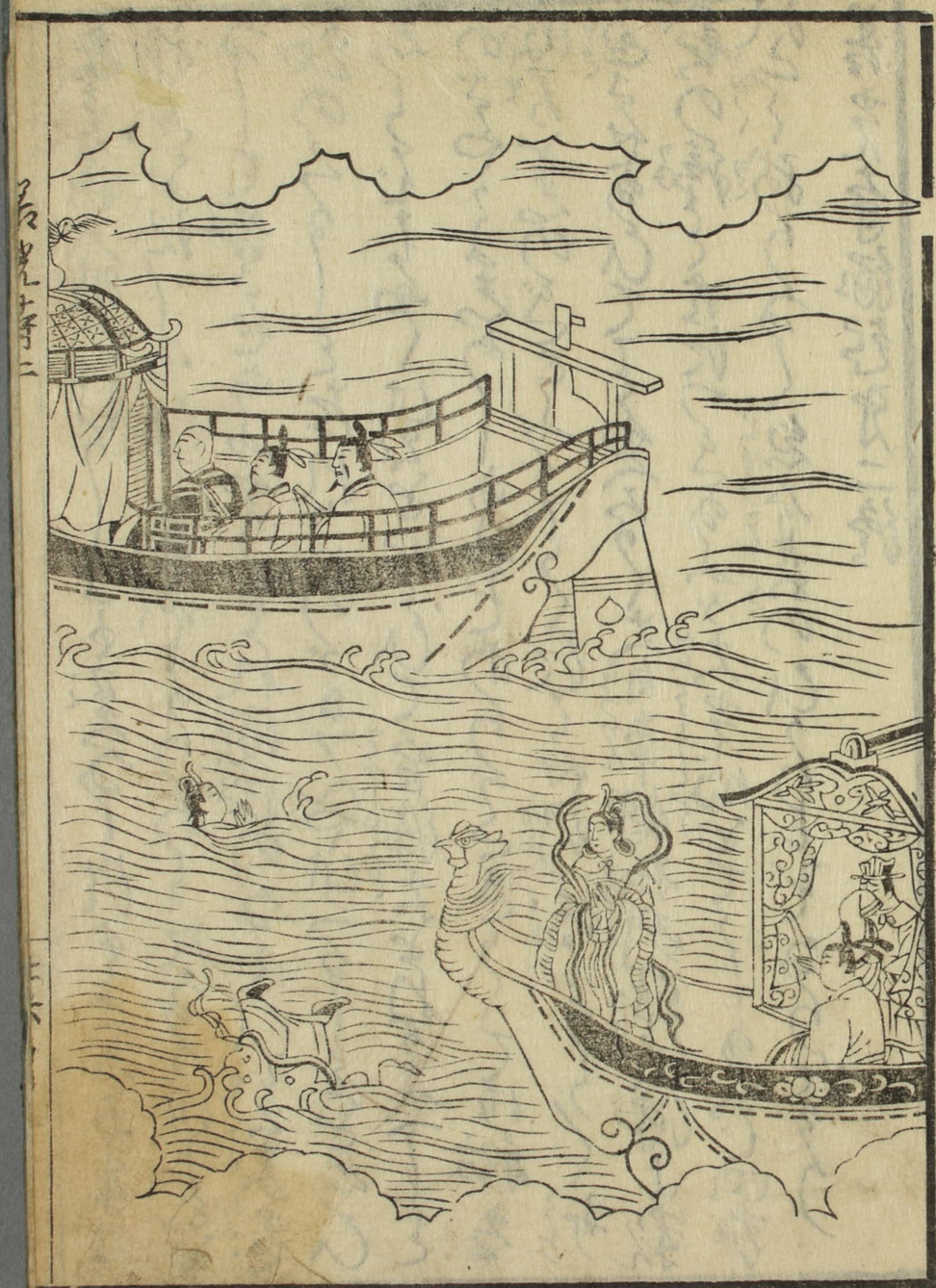
我法流東故附使貢献宜信行者也貢

上

如右　已上

（十六）かくて法師と出しそうに流門乃后妃すうくの侍
妃とをそうたまうひ月はハ遷幸帳のもとにあたまひて
法師にあをもれのこれどもあ身のはわらを
とうかくたまひてんのうるめまうぐうび海乃
色にいでさせのひてみぐさこがまとさせのひろうぐ
光所は后みくくのくまひろいかとれくあ清乃ぞあ
つくとをそうのひうりよてうされまうんことはれ
たのくこれのうとのうつそびくにうとれまいうせて
のちさいうぐら業信れをそ雪とうらひ海之の月とうぐめ

まうん海妻のようれとひうぐくし海ちれ再とれ海
とうさくめのくとてそびうくれ衣の琴語とうてめ
すうよ信書くまりは和くしとうぐうつさ家うりた
まくうくそんくまくまく海底にをびへて大海まとぐ
のひうう乳母大臣百度のうくの侍女とうぐめて
あうてさうぐそれどもとうぐめまうよううるく
号怪魔うくてみぐさうれうくむうれいみくかく
ありそれであうあくあ女めぐそうきてめまくわ
うをまうれうくそよは后よさくうれまいうせ
ていうくあ猛のをそうまのうひうん都ふとれみぐ
海ちうよちびうせのくそとそれのくをとそれつぐい



て海へとび入しかとうりにてあそれなれとべく
侍女のうばこ百四十余人のりこまらぶ海よ
にうるびこ乗りこまりぶ来迎しあひて小揺しあ
ことありがさそれ美香四方にうりそれどもぶひ
さうりて沒くよにけしよこそえ揺乗泄生の桐
とあらはこそ人こそ人こそ人こそ人こそ海を
海とのうりうりのくて芽ようもとまりそれば
四中ひきぬ海たどやこそうとたどこそこそこそ
来ぬ拾ぬそれひやこうばる地よこけあるよつぐこと
まこと義ひとこそし月日星のこえをひうりとし
ありこそこえこうばうりこの名あうりこうるこ

釈尊入滅のむかしよりかくまでつたへきたりし事は
神変を現じたまひて虚空よりあらはれたまひし名を
みして罪をせめたまふそれ閻浮のかうひにしたがひ邪正
都のうちにたれかはこのかねのひびきをきかずといふことなし
あらたなる御しるしをうけて極楽浄土をねがふべしと
おぼしめしたまひてありがたくおもひて佐殿は
浪速のさとのつづきにつきて湯浅のまうらく帰
色させたまひてさて大同年中摂津国難波の浦にて
夜の縁にたへつきたまふ太子の御建立の寺
此所を観音の霊地として末代にいたるまでめでたき
善光寺縁起第二終